

桜並木

題字：入江 美恵子様

デイサービス・コスモスご利用者様



平成 29 年 11 月 5 日、コスモスガーデン桜の里及び社会福祉法人春幸会特別養護老人ホーム
なの花にてお祭りを開催しました。入所者様による音楽演奏、畝刈保育園の園児様による
“御神輿”、スタッフによる“よさこい”などで大いに盛り上がりました。また、入所者の
皆様で作成した 12 ヶ月分の飾り絵を掲示。さらには、焼き菓子や綿あめ・焼き芋・ヨーヨー
釣り・手芸品のお店で買い物を楽しまれた皆様。「今度はいつずっとね？」と尋ねられ、
「1 年後なので、元気に過ごさんばですネ～ (笑)」と返事をするスタッフでした…。



桜並木

第 40 号
平成 29 年 12 月



医療法人
秋桜会

〒851-2211
長崎市京泊 3 丁目 30 番 3 号
TEL 095-850-6866
FAX 095-850-4888
WEB www.cosmos-garden.com

 **facebook** もご覧ください 

公式サイトへ
QR コードで
簡単アクセス



cosmos-garden

似顔絵ギャラリーコスモス開催中

ホワイトボードに似顔絵

デイサービス・コスモス



上の 4 枚の似顔絵、誰だかわかりますか？この似顔絵はデイサービス・コスモスのスタッフが事業所内のホワイトボードの片隅に水性マーカー 1 本で描いたものなのです。業務終了後、自分のスマートフォンで著名人の画像を検索し、描きはじめたのですが、「似ている！」と評判を呼び、今回ご紹介させていただきました。

1 人描くのにおよそ 30 分。描いたものは、そのまま掲示しておいて、その後はもったいぶらずに消去。「できれば毎日更新して描きたいんですけど・・・」と話す作者。さすがにそれは難しいので、現在は 1 週間に 1 人～2 人のペースで描いています。学生時代、美術が得意ではなかった私からすれば、うらやましいばかりの才能。ちなみに写真の 4 人の答えはおわかりですよ！ ええ！ わからない？ もし「わからん」という方がいらっしゃる場合にはデイサービス・コスモスまでお問い合わせください（笑）。

食欲の秋もいいですが、運動も

人工芝のフィールドで

デイケア新港

先日、当法人は株式会社 ARROWS NAGASAKI（アローズナガサキ）様と、パートナーシップ契約を締結いたしました。アローズナガサキ様はスポーツと医療・福祉との関りを重視され、「高齢者の健康で喜びのある生活環境づくり」を目指しておられます。

デイケア新港では、アローズナガサキ様の屋外型人工芝フィールドをお借りし、ご利用者様と一緒に運動をしてきました。ボールを使ってレクリエーションをしたり、歩行訓練をしたりと気持ちのいい汗を流しました。



「ヨカところやったよ～」 「また行きたかー！」という声が聞かれたので、2週間後またお出かけ。今度は60mのトラック上に、『輪投げ』、『玉入れ』、『ドリブル』、『ラダートレーニング』の4種目を準備。ふわふわの人工芝を目にして、「踏むとのもったいなか～」と躊躇されるも、フィールドに入ると「あら～気持ちのよかね～！」と一言。「外で運動するとは良かね～！」と皆さん1周、2周、3周と周回を重ね、『スポーツの秋』を楽しまれていました。

グループホームのある日

コスモスを観にお出かけ

グループホーム・新港

秋晴れに恵まれたある日、グループホーム・新港の入居者様と一緒に『あぐりの丘』までお出かけしてきました。「全員で！」とはならなかったのですが、スタッフ合わせ総勢 18 名が参加。園内にあるコスモス畑の散策を楽しみました。満開にはまだ時期が早かったのですが、途中ベンチでお茶を飲んで休憩したり、放牧されているヒツジに話しかけたりと秋の一日を満喫されていました。屋外に出ることで気分もリフレッシュ。その日の夜は皆様よくお休みになりました。今度はお弁当を持ってお出かけしましょうネ。



ハーモニカに合わせて

グループホームコスモス 1



グループホームコスモス 1 からハーモニカ演奏に合わせた歌声が聞こえてきます。“ふるさと” “われは海の子” “もみじ” などいわゆる学校唱歌がつつぎと響き渡ります。

入居者の引地様の特技は『ハーモニカ演奏』。ご自身の歩行器の中には 3 種類のハーモニカが常に入っています。何でも「小学生の時に習った曲は全部演奏できますよ。」とのこと。それを聞いたスタッフが曲目をリクエストすると、見事な演奏を披露してくださいました。他の入居者様も昔を思い出されたのか自然と演奏に合わせて歌い始め、気が付けば大合唱に。唱歌だけでなく“上を向いて歩こう”などの歌謡曲もレパートリーに入っているそうです。

歌うことは、脳を刺激し、脳の機能を保つにも役立つそうです。また、声を出すことでストレス解消にも！

さあ今日も、皆様で歌って健康になりましょう！



連載小説

「僕の暗い青春」

作者：井下長治

※このお話は、フィクション？です

【今回から新章です】

▼この春からついにボクらは学校内で最上級生になった。何人かのコワモテ教師以外には、もうボク達に命令したり、文句を言ったりする輩はいない。クラス担任はセシボンほどではないが優しかった。時折、学年集会があり、「来春に向けて受験勉強を始めるように」とうるさく言われるものの、ほとんどの生徒がまだピンとこないのか、反応はいまひとつで、多くが最上級生になった優越感に浸っているようであった。中には上級生という重しが取れた途端に、勢力争いに傾き徒党を組む者もいる。1年生の頃、幅を利かせていたジャイアンに代わり近頃は山上君が番長に君臨していた。ただ、ゴールデンウィークが終わってから見かけなくなっている。噂によると今、鑑別所に入っているらしい。留守を預かる副番長というのが、1年生の時セクハラ英語教師『エロじじい』に凄絶な体罰を受けた澄也だった。『エロじじい』も今の澄也と会ったら多分逃げ出すだろう。幸いにして彼のじじいは定年退職していた。▼中間テストの結果が、廊下の壁に掲示されている。ボクとき一坊は人だかりの後方でピョンピョンと跳ねながら、試験結果を覗こうとしてもがいていた。二人は腐れ縁というか悪縁というか、またまた同じクラスになっている。「ワイ、昭一ににも負けとるやっか。どがんもならんバイ。」ボクがからかうと、ムキになったき一坊が「昭一とは10点も離れとらんぞ！ワイこそ今度は島原に負けとるやっか！！」「ヨカと、たまにはアイにも勝たしてやらんばやる。」「な～んば言いよつとか、一所懸命しても負けたくせ。」「な～んてか～、昭一にも負けたくせ、偉そうに言うな！」そんな他愛もない争いの渦中にあるボクの肩に手をかけ、後方に引っ張ろうとする奴がいる。「な～んばしよつとや、すんな！」注意したにも関わらず、引く手の力は増してきた。「すんなつち言いよろうが～、こんバカが！」大声を出しながら振り返ると澄也が立っている。「おめくな！」澄也の一喝に一瞬たじろいだものの、「ワイも見たかとやったら、ちゃんと並べさ。」と言い返す。「そがんと見てどがんすつか。ワイに用のあっけん、チョット顔かさんや。」何の用か思い当たることもないまま、き一坊に「ちょっと行ってくっけん。」と別れを告げ、澄也の後を追った。▼階段を駆け上がり屋上に出ると、上着のポケットに両の手を突っ込んだままの格好でボク見据え、「ワイ、こん頃チョットトッポカなあ～！」澄也がほざく。「オイ何かしたかな～？」身に覚えのない事を言われ素直に発した一言がまた彼の気に障ったようである。「そがんところがトッポカて言いよつとやっか！」そう言いながら突然右の拳で殴りかかってきた。彼が右手をポケットから出した瞬間、殴られそうな予感がしたので、咄嗟にパンチをかかわすことができた。澄也は思い切り繰り出したパンチが空を切ったため、その体は伸びきり、横顔をボクの目の前に晒す。事の成り行き上、否応なく眼前の横顔を思い切り殴ってしまった。バランスを失った澄也は横転し、暫く倒れこんだままであった。たった一撃であったにも関わらず、立ち上がろうとしてこちらを見た時の彼の瞳からは、先程までの相手を凌駕するような眼力が消え、戦意喪失したかのような気配が窺えた。「もうヨカろうが！」そう言っても彼はうなだれたままだった。▼階段へ向かうとき一坊が心配し様子を見に来ている。「澄也ばやったらヤバかつちやナカや？」「なしてか？」「なしてかって、ほら、山上がもうすぐ戻って来っかかもしれんたい。そしたら、何人ちゃでワイばくらしに来っかかもしれんぞ。」「あ～そうか」自分でも漠然と脳裏をよぎっていたので、今更ながら憂鬱な気分になった。教室に戻るとほどなく、1年後輩の四峰が息せき切ってやって来て、「先輩カッコよか～！」突然ボクを称え始める。「何ば急に言いよつとか？」戸惑いながら尋ねると「何ばトボケよつとね。さっきオイ、向こうの屋上から見とつたバイ。澄也さんが叩いてきたとば、パつとよけて、その後1発でまぐらしたタイ。カッコよかつた～！」手を叩いて喜ぶ四峰。「えっと人に言うてサラくなよ。だいたい、あん時澄也はまぐれとらんやつたつぞ。何しろ、もうココだけの話にしとけ。澄也のメンツもあつとやけん。ヨカか？」「ハイ。」彼は素直にそう言うのでそそくさと自分の校舎の方へ去って行った。彼は素直な返事はしたが、従順ではなかった。1週間とたたないうちに、「澄也ばまぐらしたげなネ」何人からもそう声をかけられた。澄也の仲間達からは明らかに怒りの眼差しを向けられる。「オイは言うてサラきよらんぞ。」そう言いたかったが、詮無いことに思えた。そしてだんだんに悪い予感がしてくる。(つづく)